

年間第3主日 A年  
神のことばの主日  
世界こども助け合いの日  
東京教区ケルンデー

第一朗読 イザヤ 8・23b～9・3  
第二朗読 一コリント 1・10-13、17  
福音朗読 マタイ 4・12-23

2026.1.25 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

今日の福音では、イエス様がガリラヤ湖のほとりで最初の弟子たちをお呼びになる場面が朗読されました。湖のほとりというか、元々の言葉は「海」となっています。海、海辺——たまたま現代では「それはガリラヤ湖のことなんですね」って訳す人は分かっているので、「湖」と訳してしまいますけれども——直訳的に「海」とした方が、そこに込められている意味を汲み取ることができます。

というのも、聖書において、海と陸というのは単なる物理的な場所の名前と言うよりは、象徴的な意味を持つています。「陸」っていうのが神の御言葉に従う人々の場所。「海」が神に従わない、ユダヤ人には異邦人の世界、あるいは「神なき世界」っていうのがまとめて「海」なんです。聖書の時代の人たちの感性では、海というのは得体の知れない場所、陸っていうのは人間が生きる場所。神に従う場所は陸、従わない場所は海っていうようなことなんです。

だから、海辺にいるっていう、境界線、海と陸の境目で暮らす漁師という存在は、ただ職業のことと言うよりは、わたしたちの心のあり様を表しているようす——海に属しているようで、でも陸にいる。陸にいるようで海にいるっていう。わたしたちの心の中を振り返れば、神様に従いたい、そして従おうと決断する瞬間もあると同時に、神を信じない者かのように振る舞う時もある。そういう境目にいる。でもそこにイエス様がいらっしゃって、呼びかけて、そして陸へと旅をしていくわけになります。「神と共に歩む」ことへと絶えず呼びかけておられるというのが、今日の出来事の象徴的な意味のように思います。

でも、「神なき世界」というのは、ただキリスト教の教会に所属していないとかいうことではないし、あるいは人に暴力をふるったりとか盗んだりとか、そういう極端なことだけではなくても、わたしたちも絶えず「神なき世界」的な考え方や振る舞いに陥る危険にはいつも晒されているということを思い起こす必要があります。突き詰めていえば、それは「自分のことしか考えない」っていうことになります。

今日、わたしたちは東京教区として「ケルンデー」のごミサでもあります。毎年申し上げることですけれども、このケルンデーの発端というのは、第二次世界大戦のあとに、ドイツのケルンの町も大変破壊されて、そして復興していかなければならぬ中で、当時のケルン教区の枢機卿様が「キリスト教的な精神の復興のためには、自分たちの復興や自分たちのことだけを考えているっていう方では精神的な復興は成し遂げられない。こういう時こそ他の人に心を向ける、——その具体的なプロジェクトの必要性を痛感されて——同じように敗戦していろいろなことを立て直していかなければならぬ東京の教会をみんなで支えましょう」っていうふうにケルンの教区の人たちに呼び掛けられたっていうのが発端です。そのおかげで東京のいろいろな教会がもう一回建て直され、またいくつもの新しい教会が設立されたということになります。一方で、東京の教会は祈りを通して、ケルンが、特に当時は司祭や修道者の召し出し、またキリスト教的に人々がイエス様の呼び掛けに答えることができるようになって、祈りを通してお互いに繋がるという面もあるわけです。

当時のケルンの枢機卿様が「東京の教会を援助しましょう」って言ったときに、当然、「自分たちもいろいろ破壊されてそこから復興していかなければならぬのに、どうして他の人ですか？まず自分たちのことをやってからではないのか」っていう反対意見は強かったと言われています。でも、申し上げましたように、「キリスト教的な精神的、靈的な復興のためには、自分たちのことだけを最優先しててはそれは成し遂げられないんだ」という強い思いでみんなを説得されたって聞いてます。それが、今日のケルンデー。

わたしたちもその精神を思い起こしながら、「神なき世界」に留まるというのは、他の人を傷つけたり悪いことをする、それもそうなんだけど、でももっと気が付かないところで、いろいろな問題の中をわたしたちは歩んでますけども、その問題しか見

えなくなるっていう、他の人への心が、あるいは視線が失われてしまう、そういうことこそが「神なき世界」、つまりは「海」、そういう誘惑だと言うことができるんじゃないかなと思います。

その境を、わたしたちは「海」に留まるのではなく、絶えず「そこから出でていくよう」ってイエス様が呼んでおられるし、「陸」でしかわたしたちは生きられないんだ、それは、自分のことだけを考えていってはいつまでたってもわたしたちはそれを乗り越えていく力を得られないと同時に、そういう世の中では互いが人間を生かすことができないっていう呼び掛けでもあると思います。

昨日は聖フランシスコ・サレジオっていう 16 世紀後半のジュネーブの司教様の聖人の記念日でした。そのフランシスコ・サレジオっていう聖人はいろんな信仰生活の手引きを忍耐強く人々に進めた人ですけど、その中で「ミツバチのたとえ」——「ミツバチは蜜しか集めない。いろんな花から蜜しか集めないミツバチのように振る舞いなさい。それは、どんなこと——他の人との繋がりとか自分の人生——からでも良いものだけを受け取るようにしなさい。どんなことからでも良いものだけを受け取るっていうのは、靈的に荒んでいる、靈的に乾き状態の時でも、また、困難の中にあってもできる。但し、自分の問題が完全に取り除かれるっていうことだけを求めているならば、そこから利益を得るということはできません」とおっしゃっています。

わたしたちが分の問題の中に直面してそれを担っていかなければならぬということはそれぞれの人間の課題であると同時に、しかしそのことだけに意識を集中してしまうならば、恵みを得ることができなくなります。それが、ケルンの枢機卿様の「自分たちの復興だけに集中するならば、神の恵みから自分たちを遠ざけてしまう。キリスト教的な、靈的な復興はできないんだ」と言られた考え方を通じているように思います。

わたしたちも、共同体としてあるいは一人ひとりの人生において、いろいろな問題に直面しなくてはならないし、担っていかなければならぬ。しかし、それが他の人に対して、また、ひいては神様の恵みに対して心を閉じてしまう誘惑となることなく、むしろ神と繋がり、他の人のいろいろな困難を思いやるきっかけになるように、そういう意味でわたしたちのものの見方を変える、回心の気持ちは絶えず必要だと思います。

今日、海辺でわたしたちを呼んでおられる——どっちつかずっていうか、どっちにも転ぶんだけど——わたしたち一人ひとりをイエス様が呼んでおられるということを思い起こしながら、主に従って「神ある世界」、それはただ神様とかイエス様とかキリストとか、そういう外的なことではなくて、困難にあってもいつも他の人に心を閉じることがない、そういう意味で神様と共に世界へと従っていくことができますように、その導きに心を開き、そして歩んで行くための力をイエス様ご自身から頂く、その思いでこのミサを通して恵みを願い合いたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>  
携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>